SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ガンディーの「非暴力」の思想の射程：アーレントの「暴力」を手がかりに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡哲学会 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 和光 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025652

ガンディーの「非暴力」の思想の射程
――アーレントの「暴力」を手がかりに

松尾和光

1. はじめに

本報告では、ガンディーの「非暴力」の思想の射程について、アーレントの「暴力」に関する考察を手がかりに検討する。なぜなら、一般的に、ガンディーの名前とともに「非暴力」が採り上げられ、望ましいものと称賛されるが、その言葉がどのような意味を持つかは十分に理解されていないように思われるからである。「非暴力」(non-violence)とは、さしあたり、暴力の不在すなわち相手の身体に害をなすような物理的な力を行使しないという点で、暴力の対立概念として位置づけられる。しかし、マハトマ・ガンディー(Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-1948)は、非暴力を単に暴力を振るわないという意味ではなく、無私、純潔、禁欲、不盗、無所有、無畏(真勇)などの様々な戒律も含み、さらには「普遍的な愛(Universal Love)」までも意味する積極的な思想として展開した。[1] ガンディーによって提唱され指導された非暴力不服従の運動は、イギリス帝国領南アフリカ連邦(当時)における人種差別政策に対しての公民権運動において、また後にイギリスからのインド独立運動において重要な役割を果たした。ガンディーの「非暴力」の思想は、公民権運動にとどまらず、アルネ・ネスのディープエコロジー、緑の党、E・F・シューマッ

ハーの「中間技術」、スリランカにおける「サルヴォダヤ運動」などの環境思想や環境運動でも言及されたり影響を与えたりしている。[234]

暴力は「強制し、屈服させ、拷問にかけ、破壊し、すべての可能性へ通じる扉を閉ざすもの」である。[5] 対照的に、「非暴力」は、暴力的なもの以外の平和的なあらゆる方法を許容することで、豊かな可能性を有していると考えられる。例えば、自然環境を改変することは、自然を人間と技術に屈服させ、破壊するという点で暴力であり、またその自然環境の改変によって影響を受ける人間に対する暴力でもある、と考えることができる。しかし、自然環境に対して非暴力であることが望ましい、と一口に言ってしまうのは粗雑な議論である。なぜなら、自然から資源を取り出すことなしに、人間は生きていくことができないからである。したがって、「非暴力」が望ましいと考える場合、何がどのように暴力的であって、それに対して非暴力がどのようなものであるのかということを明らかにしなければならない。

考察の手順は次のとおりである。まず、ハンナ・アーレントの暴力と権力に関する考察を踏まえながら、「非暴力」の哲学的根拠について考察する。次に、「非暴力」の伝統的な意味とガンディーによって拡大されたそれとを確認することによって、「非暴力」の思想が持つ多様な意味を明らかにする。最後に、ガンディーの「非暴力」の思想の意味を、アーレントの「暴力」に関する考察を手がかりに検討する。

なお、本報告は、二〇一五年十一月三日に開催された静岡哲学会第三十八回大会において発表した「非暴力の思想の射程—技術の選択を手がかりに」の内容を、発表時の質問に答えるために改題し、改稿したものである。

2. 「非暴力」の思想の哲学的根拠

本節においては、ハンナ・アーレントの暴力と権力に関する考察を踏まえながら、「非暴力」の哲学的根拠を明らか

にする。まず、アーレントの「行為」と「行動」という区分を用いて、「暴力」とは何であるかを明らかにする。次に、「暴力」と結びつきやすいとされる「権力」が何であるかについて、再び「行為」と「行動」という区分を用いて明らかにする。最後に、「行為」と「行動」の区分を用いて、「非暴力」の哲学的根拠について考察する。

2－1．「行為」と「行動」の区別と暴力の定義

ハンナ・アーレント（Hannah Arendt, 1906-1933）は、『On Violence（邦題：暴力について）』において、人間が人間を支配する手段である五つの諸力―権力（power）、力（strength）、強制力（force）、権威（authority）、暴力（violence）に関する詳細な検討を行い、それぞれの定義づけを行っている。[6] これらの諸力の性質を明らかにする上で重要なのが、「行為（action）」と「行動（behavior）」の区別である。一般的に、行動が「環境刺激に対する受動的・生理的反応」であるのに対して、行為とは「主体的な心的状態とそれに基づくダイナミズムとを持つとされる存在者の動作の中で、意識的、意志的、意図的、目的的などの諸側面を重視」されるものである。[7] アーレントは、人間の事柄の領域における自動的な過程を中断させ進歩をもたらすものは、暴力すなわち「たんなる行動」とは区別される「行為」が果たすべき機能であるとしている。[8]

なお、アーレントは『The Human Condition（邦題：人間の条件）』において、人間の条件の最も基本的な要素として三つの活動力、すなわち人間の肉体の生物学的過程に対応する「労働（labor）」、人間存在の非自然性に対応する「仕事（work）」、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる「行為（action）」の三つを挙げ、さらに、行為を「同じモデルを際限なく繰り返してできる再生産物」で「予見可能なもの」である行動と区別している。[9] すなわち、行動は行為と区別されるものであるが、同じカテゴリーのなかの延長である。要約すると、行動とは、「本能に

基づく動物的、自動的なもの」であり、これに対して行為とは、「言語を通した人との関わり」であるといえる。このことからも、「行為」と「行動」の区別によって権力と暴力を分けることの正しさが確かめられる。

アーレントによると、暴力は、道具的である（instrumental）という特徴によって他の諸力と区別される。また、現象学的には「力（strength）」に近いことから、単体の、個体的実在のうちにあるという性質を持つと考えられる。[10] このほか、暴力は、目的による導きと正当化を常に必要とし、つまり（目的に対して）手段であるなどの特徴を有している。したがって、暴力とは、「行為」ではなく「行動」のカテゴリーのなかに位置づけられるものである。

2－2．「暴力」の対立物は「権力」

前項の冒頭で述べた五つの諸力は、現実の世界においては、整然と区別されるものではない。特に、権力と暴力は、命令と服従の観点から考えるとは等しいものと捉えられやすいが、アーレントはこれらを注意深く見分けている。

権力は、「他者とともにある限りにおいてのみ存在」するものである。[11] 権力は、数や意見すなわち多数性に依拠し、集団に属するものであり、承認や尊敬、正統性を必要とし、それ自体が目的であり、政治的共同体に本来的に備わっているものである。したがって、権力は「行為」のカテゴリーに位置づけられるものである。また、権力と暴力の関係については、純然たる暴力支配は権力が失われたところで始まる。権力によって暴力が支持され制御されなくなったところでは、手段－目的の転倒によって、権力の破壊が目的となる。

前項では、さしあたって暴力の対立概念は非暴力であると説明したが、アーレントのいう「行為」と「行動」という区分を用いて解釈するならば、暴力の対立概念は非暴力ではなく、権力であるということになる。

2－3．非暴力は暴力の延長にある

暴力と権力とを注意深く分けることができた「行動」と「行為」の区分を用いる場合、非暴力はどちらに位置づけられるのか。非暴力は、道具を用いることはなく、また、単数の、個体的実在のうちにあるのでもない。数や意見すなわち多数性に依拠し、集団に属するものであり、承認や尊敬、正統性を必要とするものである。したがって、非暴力は権力と同じ「行為」の区分に位置づけられると考えられる。しかし、アーレントが「非暴力を暴力の対立物と考えるのは正しくない。非暴力的権力というのは、実際のところ、冗長表現である」と述べているとおり、非暴力は暴力の欠如態として、暴力と権力の間の延長上の、暴力よりも権力に近い側に位置していると考えられる。[12] もちろん、アーレントの議論は近代的な個人を前提としているという点で、彼女のいう「非暴力」とは西洋的な理解によるものであるといえる。

しかし、非暴力と権力は全く同じものではない。権力が、特定の人物に行使が委ねられているのに対して、非暴力は一人ひとりが直接の行使者であり、実践者である。この意味において、非暴力は、権力よりも直接的な大衆の行為に依拠しているのである。

なお、アーレントは「多数性」こそが全政治生活の最大の条件としているが、「政治的である」ということは、古代ギリシアにおけるポリス（都市国家）での生活、すなわち「すべてが力と暴力によってではなく、言葉と説得によって決定される」社会を意味している。[13] 非暴力が多数性に依拠しているということは、つまり、政治的共同体すなわちコミュニティに関わり、対話を重要な要素とするということである。

このように、非暴力が暴力と権力の間の延長上にある相対的なものであることが明らかにできたことで、われわれは何が暴力であり、何が非暴力であるかということを判断しやすくなるだろう。例えば、医療行為の一つである注射

は、痛いものであるし不快であるが、これは暴力なのか、それとも非暴力なのか。注射は病気から早く回復するための、あるいは病気を予防するための「手段」であり、注射器という「道具」を用いる点では暴力であるように思われる。健康という「未来の目的のための正当化を必要とする」点で暴力のようでもあるが、病気になったという「過去に訴えることを根拠」に正統性があるという点では非暴力のようでもある。しかしなにより、生理的・受動的な「行動」ではなく、意識的に、また人々の承認の下に行われる意図的な「行為」である。つまり、注射は、道具と直接に結びついているなどの暴力的な特徴も有してはいるが、人々の承認の下で意識的に行われる点で非暴力的なものである。したがって、暴力と非暴力とは単純に分けられるものではなく、その事物のさまざまな性質を注意深く相対的に評価しなければならない。

3.「非暴力」の思想が持つ多様な意味

本節では、「非暴力」の伝統的な意味とガンディーによって拡大された意味とを確認することによって、「非暴力」の思想が持つ多様な意味を明らかにする。まず、「非暴力」の伝統的な意味が宗教的な戒めに根ざしていることを確認する。次に、ガンディーによって拡大された「非暴力」の意味を検討する。最後に、西洋的、政治的な「非暴力」と東洋的、宗教的なそれが、ガンディーによって統合、発展されたことについて検討する。

3－1.「非暴力」の伝統的な意味

「非暴力」の伝統的な意味は、宗教的な戒めである。「非暴力」はサンスクリット語で「アヒンサーahimsa」といい、「暴力（ヒンサーhimsa）の忌避」を意味している。元々、古代インドにおけるベーダの祭式の要素である家畜の殺害

（ヒンサー）に対して、輪廻とそこからの解脱を唱える人びとによって強調された徳目であり、漢訳語では「不殺生」と呼びならわされている。[14]「不殺生戒」または「殺生戒」（生き物を殺してはならない）は、仏教とジャイナ教、（ヒンドゥー教の源流である）バラモン教のマヌ法典において、ともに五戒の第一番目に挙げられている。[15]そうしたことから、本項でいう伝統的な「非暴力」とは、いわば東洋的なものである。

ただし、この「非暴力」＝「不殺生戒」の配慮の対象や方法は、宗教によって異なる。例えば、仏教においては、人を殺すことは殺生のなかでも大罪であり、畜生（鳥獣虫魚などすべての動物）を殺すのは単堕の罪であるとされ、区別される。[16]畜生という表現のとおり、ここに植物は含まれていない。他方、ジャイナ教においては、出家が細心を払うだけでなく、在家も、漁業、耕作によって土中の虫を殺す恐れのある農業、長旅によって地面の小さな虫を踏み殺す恐れのある交易商などの職業を忌避するほどであり、動物はもちろん、細菌、菌類、空気、水、火、岩なども含めて、自然のものはすべて生きており、すべての命が神聖であると考える。[17][18]つまり、ジャイナ教においては、動物や植物などの生物だけでなく、岩などの無生物でさえもアヒンサーの対象としている。

ここで明らかなように、「非暴力」の伝統的な意味は、宗教的な戒めであり、おおむね「生き物を殺したり傷つけたりしてはならない」という否定的な意味で共通している。つまり、業（カルマ）に対する畏れやヒンサーを受ける動物に対する憐憫の情である。また、その配慮の対象や方法は宗教によって（おそらく宗派によっても）差異があり、様々な解釈の余地を持っていたのである。したがって、伝統的な「非暴力ahimsa」は、前節で検討したアーレントのいう「暴力violence」――人間が人間を支配する手段の一つであり、つまり目的―手段の連関で捉えられ、道具に依拠しており、また行動という区分で位置づけられるもの――の延長である西洋的、政治的な「非暴力non-violence」とは意味が異なる。そこで次項においては、この東洋的、宗教的な「非暴力」の意味がガンディーによってどのように拡

げられたかについて検討する。

3-2. ガンディーによる「非暴力」の意味の拡大

ガンディーのいう「非暴力」も、前項で確認したような宗教的な意味に根ざしており、つまり、彼の非暴力の原点はnon-violenceではなくahimsaである。しかし、彼は「非暴力」の意味を宗教的な戒めに押しとどめることなく、大きく広げることができた。彼にとって、生き物に危害を加えないことはアヒンサーの一部であって、それは最低限の表現である。[19]

ガンディーのいう非暴力には、ブラフマチャリヤ（純潔）、嗜欲の抑制、不盗、無所有（清貧）、無畏（真勇）などの様々な戒律が含まれる。[20] また、戒律ではないが、不可触民制の撤廃、パンのための労働（生きるために働くこと）、寛容、謙虚、スワデシ（国産品愛用）などもアヒンサーの重要な実践であるとしている。[21] さらに、アヒンサーの原則は邪念や過度の焦燥、虚言、憎悪、遺恨などによっても損なわれる。[22] 言い換えれば、正念、安堵、真言、信愛や許しなども非暴力に含まれるということであろう。このように、ガンディーにとっての「非暴力」は、宗教的な戒律を踏まえながらも、様々な徳目を含み、さらに信愛や許しなどの積極的な意味を含んだ「普遍的な愛」となった。[23]

ガンディーが非暴力の意味を拡げることができた理由として、少なくとも次の三点は明らかである。第一に、様々な宗教に対して寛容であったことである。これには、彼の家庭環境が大きく影響している。ガンディー一家はヒンドゥー教のヴァイシュナヴァ派という宗派に属していたが、彼の父母は自宗だけでなく他宗の寺院にもお参りし、幼いガンディーもそれに同伴した。また、商人のカーストである父親を尋ねてくる客には、ジャイナ教の僧侶、イスラム教徒やパーシー教徒（ゾロアスター教）の友人などがいて、ガンディーも父の介護に携わりながらその広い交友関

係を見ている。こうした経験が彼のすべての信仰に対する寛容さを育てた。[24] その結果、ガンディーにとって様々な宗教は、「同じ場所に到達する別々の道」と理解されたのである。[25]

第二に、「非暴力」と「真理（サッティヤー satya）」との関係である。彼にとって、真理の探究とは、真の献身であり、神に至る道である。[26] その真理に内在するのが、ブラフマチャリヤや嗜欲の抑制、不盗などの戒律である。[27] 彼にとって真理が最高の目的であり、非暴力はこれを実現するための手段であり、様々な戒律はこの非暴力の下にまとめられるのである。彼は、南アフリカで行った非暴力不服従の運動を当初は「受動的抵抗（passive resistance）」と呼んでいたが、後にこれを「サッティーヤグラハ（真理の把持 Satyagraha）」と呼びかえるようになった。このことは、非暴力は手段であって真理が目的であるという関係をよく示している。[28] ただし、この手段と目的の関係も整然と分離されているものではない。ガンディーにとって目的（真理）と手段（非暴力）は分かちがたく結びついていた。[29] だからこそ、さまざまな徳目のなかでも真理の次に位置づけられる最も具体的なものが非暴力だったのである。

第三に、信仰と実践の結びつきである。冒頭に述べたように、ガンディーの非暴力不服従は南アフリカでの公民権運動として始まっている。彼は当地に弁護士として訪れたとき、同胞が受けていた人種差別を目の当たりにし、また彼自身もそれを経験した。それは社会的、政治的な暴力であり、ときには直接に身体的な暴力でもあった。信仰心の厚いガンディーはこの差別と戦うことを義務と考えた。[30] このように、ガンディーにとって、信仰と現実の問題とは別々のものではなく、常に信仰は現実の問題へと向けられた。それゆえに、戒律にはない事柄―不可触民制の撤廃、パンのための労働、寛容、謙虚、スワデシなど―もアヒンサーの重要な実践として取り組まれたのである。

以上のように、ガンディーの「非暴力」は、東洋の伝統的な宗教的戒めを基礎にしながらも、宗教的な寛容さを得て、様々な徳目を含み、さらに現実の生活における諸実践まで含むものである。

3－3．政治的な「非暴力」と宗教的なそれの統合と発展

3－1項で検討したように、アーレントによって「行為」と「行動」の枠組みから導き出される西洋的、政治的な「非暴力」と、輪廻とそこからの解脱や生き物への憐憫の情から強調される東洋的、宗教的な「非暴力」とは、その対象も意味も異なる。前者は人間を対象としており、「行為」という意図的なものであり、権力と同様に多数性に依拠し、したがって政治的共同体（コミュニティ）に関わり、対話に依拠したものである。対照的に、後者は人間に限らずありとあらゆる生き物（ジャイナ教においては無生物でさえも）を対象とし、憐憫の情という点では感情的、すなわちアーレントでいうところの「行動」である。また、戒めが人間の集団を取りまとめるという点では多数性やコミュニティにも関わるが、個人の道徳的な実践にも意味を持たせる。

ガンディーの「非暴力」は、これら異なる二つの「非暴力」を弁証法的に統合し、さらに広い意味を与えたものと理解することができる。彼は、宗教的な戒めを基礎に持ちつつも、より積極的な意味を与え、対話を通じて大衆に訴えて政治的な独立と自治（スワラージ swaraj）を実現しようとした。また彼は、自らもアーシュラム（修道場 ashram）を作り、宗教的な戒律を重んじながら、仲間と共にコミュニティでの自給自足の実践に取り組んだ。[31] 彼が提唱した「スワデシ（国産品愛用運動 Swadeshi）」は、西洋式の機械織りに対抗してチャルカ（手紡ぎ車）によってカーディ（布地）を生産するものである。[32] これをアーレントの枠組みで理解するならば、物の生産という点で「仕事」のカテゴリーに分類され、権力、暴力、非暴力が含まれる「行為」としては認識されないだろう。しかし、ガンディーにとっては、貧しい農村を救うために大衆に仕事を与え、労働者を奴隷にするような機械から解放し、農村の自治ひいてはインドの独立を目指すものであり、「非暴力」の具体的な実践であった。[33] 自治管理の活動であり、権力の命令を超えた必要によってなされる生産活動であるという特徴は、塩税廃止を求めた「塩の行進」にも共通している。[34] 農民という集団に

属し、承認や尊敬を得て、コミュニティに根ざして対話を重んじた実践であるという点は、アーレント的な「非暴力」が意味するところを含んでいるが、さらに産業や技術についてもガンディーの「非暴力」の思想の射程は及ぶ。

また、ガンディーの「非暴力」の思想は、環境的な示唆も与えるものである。例えばスワデシには、工場からの排出による汚染、過剰な耕作による土地の劣化、（絹や羊毛など）動物を苦しめることによる生産に依拠することを避けるということが含まれる。[35] ガンディーの「非暴力」が、公民権運動だけでなく、環境運動や環境思想にも大きな影響を与えたのは、このように非暴力の意味を拡げたことによると考えられる。

以上のように、ガンディーは、いわば西洋的、政治的な「非暴力」と東洋的、宗教的なそれとを統合し、より広い意味を与えた。この二つの「非暴力」の統合と発展は、一方で、強い信仰心を持って日々の生活のなかでの真理の探求と非暴力の実践に取り組み、また他方で、留学先のイギリスや弁護士として赴任した南アフリカでの激烈な差別や暴力に立ち向かったガンディーその人でなければ、成し得なかったであろう。

4. 結語

本報告では、ガンディーの「非暴力」の思想の射程について、アーレントの「暴力」に関する考察を手がかりに検討した。アーレントのいう「非暴力」は、「行為」と「行動」の区分で整理すると前者に属し、すなわち数や意見（多数性）に依拠し、集団に属し、承認や尊敬、正統性を必要とし、それ自体が目的であり、政治的共同体に本来的に備わっており、対話に依拠したものであることが明らかにされた（第2節）。他方の伝統的な「非暴力」の意味は、「生き物を傷つけたり、殺したりしてはならない」という否定的な宗教的戒めであるが、ガンディーによって、あらゆる徳の土台である「真理」に至るための手段として、寛容や謙虚などの実践も含む、より積極的な「普遍的な愛」にま

で拡大された（第3節）。また、ガンディーの「非暴力」は、アーレントの西洋的、政治的な意味の「非暴力」と東洋的、宗教的なそれとを統合し、さらに広い意味を持たせて発展させたものと理解できた。例えば、彼が提唱した「スワデシ」は、コミュニティの自治や国家の独立（自立）、産業、技術、環境なども「非暴力」の思想の射程に含めるものであった（第3節）。

以上のようにして、われわれは、ガンディーの「非暴力」の思想の意味とその射程の一部を知ることができた。これによって、われわれは、何が暴力的であり、非暴力的であるかを判断したり、何かを非暴力的に行おうとするときの根拠を考えることができ、したがって「非暴力」の豊かな可能性をより実現しやすいものにできるだろう。ただし、前述のとおり、ガンディーの「非暴力」の思想の射程は、日常生活、宗教、政治はもとより、産業、技術、環境などにも広く及ぶものである。また「非暴力」が「真理」の下で様々な徳目や実践を含むということからも、それが意味するところは限定的ではない。ガンディーの「非暴力」の思想を、われわれが今日的に取り組むとすれば具体的にどのようなものになるかということも、本報告においては検討できなかった。それらの探求については、今後の課題としたい。

5. 参考文献

1 M.K. Gandhi, "FROM YERAVDA MANDIR Ashram Observances" 3rd edition, Navajivan Publishing House, 1945, p.10.（ガンディー、森本達雄訳、『獄中からの手紙』、二〇一〇年。）

2 Purushottama Bilimoria, 'MAHATMA GANDHI', "Fifty Key Thinkers on the Environment", Routledge, 2001, p.164.（ジョイ・A・パルマー編、須藤自由児訳、『環境の思想家たち　下――現代編』、みすず書房、二〇〇四年。）

3 E.F. Schumacher, "Small is Beautiful A Study of Economics as if People Mattered", Vintage, 1973, pp.126-127.（E.F.シューマッハー、

4 小島慶三・酒井懋訳、『スモールイズビューティフル　人間中心の経済学』、講談社、一九八六年。）
A.T. アリヤラトネ、山下邦明・林千根・長井治訳、『東洋の呼び声　拡がるサルボダヤ運動』、はる書房、一九九〇年、一二六―一二七頁。

5 酒井隆史、『暴力の哲学』、河出書房新社、二〇一六年、九〇頁。

6 Hannah Arendt: 'On Violence' "Crises of the Republic –Lying in Politics Civil Disobedience On Violence Thoughts on Politics and Revolution" Harcout Brace, 1969, pp.142-145.（ハンナ・アーレント、山田正行訳、『暴力について』、みすず書房、二〇〇〇年。）

7 大橋容一郎、〝行為〟、『岩波哲学・思想事典』、岩波書店、一九九八年、四八一頁。

8 Hannah Arendt: 'On Violence' "Crises of the Republic –Lying in Politics Civil Disobedience On Violence Thoughts on Politics and Revolution" Harcout Brace, 1969, pp.132-133.（ハンナ・アーレント、山田正行訳、『暴力について』、みすず書房、二〇〇〇年。）

9 Hannah Arendt: "The Human Condition", The University of Chicago Press, 1958, p.7.（ハンナ・アレント、志水速雄訳、『人間の条件』、筑摩書房、一九九四年。）

10 Hannah Arendt: 'On Violence' "Crises of the Republic –Lying in Politics Civil Disobedience On Violence Thoughts on Politics and Revolution" Harcout Brace, 1969, pp.143-145.（ハンナ・アーレント、山田正行訳、『暴力について』、みすず書房、二〇〇〇年。）

11 Ibid. p.143.

12 Ibid. p.155.

13 Hannah Arendt: "The Human Condition", The University of Chicago Press, 1958, p.26.（ハンナ・アレント、志水速雄訳、『人間の条件』、筑摩書房、一九九四年。）

14 宮元啓一、〝非暴力〟、『世界宗教大事典』、平凡社、一九九一年、一五九二頁。

15 多屋頼俊・横超慧日・舟橋一哉編、〝戒〟、『新版仏教学辞典』、法藏館、一九九五年、五〇頁。

16 前掲書、〝律〟、四五六頁。

17 宮元啓一、〝ジャイナ教〟、『現代宗教事典』、弘文堂、二〇〇五年、一八四―一八五頁。

18 Satish Kumar, "YOU ARE Therefore I AM　A Declaration of Dependence", Green Books, 2002, p.52.（サティシュ・クマール、尾関修・尾関沢人訳、『君あり、故に我あり』、講談社、二〇〇五年。）

19 Mohandas K. Gandhi “AN AUTOBIOGRAPHY The Story of My Experiments with Truth” Beacon Press, pp.3-5; 27-28.（マハトマ・ガンジー、蠟山芳郎訳『ガンジー自伝』、中央公論新社、一九八三年。）

20 M.K. Gandhi, “FROM YERAVDA MANDIR Ashram Observances” 3rd edition, Navajivan Publishing House, 1945, p.7.（ガンディー、森本達雄訳『獄中からの手紙』、二〇一〇年。）

21 Ibid, pp.10-30.

22 Ibid, pp.31-67.

23 Ibid, p.7.

24 Mohandas K. Gandhi “AN AUTOBIOGRAPHY The Story of My Experiments with Truth” Beacon Press, p.33.（マハトマ・ガンジー、蠟山芳郎訳『ガンジー自伝』、中央公論新社、一九八三年。）

25 Mahatma Gandhi, “Hind Swaraj”, Rajpal & Sons, 1910=2010, p.40.（M.K.ガーンディー、田中敏雄訳『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』、岩波書店、二〇〇一年。）

26 M.K. Gandhi, “FROM YERAVDA MANDIR Ashram Observances” 3rd edition, Navajivan Publishing House, 1945, p.10.（ガンディー、森本達雄訳『獄中からの手紙』、二〇一〇年。）

27 Ibid, pp.3-4.

28 Ibid, p.19.

29 M.K. Gandhi, “FROM YERAVDA MANDIR Ashram Observances” 3rd edition, Navajivan Publishing House, 1945, pp.8-9.（ガンディー、森本達雄訳『獄中からの手紙』、二〇一〇年。）

30 Mohandas K. Gandhi “AN AUTOBIOGRAPHY The Story of My Experiments with Truth” Beacon Press, pp.109-112.（マハトマ・ガンジー、蠟山芳郎訳『ガンジー自伝』、中央公論新社、一九八三年。）

31 M.K. Gandhi, “FROM YERAVDA MANDIR Ashram Observances” 3rd edition, Navajivan Publishing House, 1945, p.1.（ガンディー、森本達雄訳『獄中からの手紙』、二〇一〇年。）

32 Ibid, pp.60-67.

33 Ibid.

34 酒井隆史、『暴力の哲学』、河出書房新社、二〇一六年、一九八―一九九頁。

35 Purushottama Bilimoria, MAHATMA GANDHI, "Fifty Key Thinkers on the Environment", Routledge, 2001, p.164.（ジョイ・A・パルマー編、須藤自由児訳、『環境の思想家たち　下――現代編』、みすず書房、二〇〇四年。）

（まつお　かずみつ　静岡大学創造科学技術大学院）